

第四回 高麗

1. 官僚国家の成立

後三国の争乱をまとめ半島を統合した高麗(고려)は、高句麗の後継を自認し、高句麗の故地を取り戻すべく積極的な北進政策をとった。ちょうどその頃、北の方では渤海が契丹によって滅ぼされ、渤海の支配層が大量に高麗へと亡命してきた。高麗は彼らに官職を与え、西京(서경、平壤)を第二の都とするなど、契丹と対決する姿勢をとった。結果、国境は大同江(대동강)と元山湾(원산만)を結ぶ線から清川江(청천강)から咸興湾(함흥만)を結ぶ線へと押し上げられた。一方、日本には通好の使節を太宰府へ送ったが日本側は応ぜず、高麗王朝と日本との間に公的な外交関係が結ばれることは無かった。

渤海の遺民を受け入れ、名実共に統一国家として歩みだした高麗は、新たな国作りに乗り出した。各地に半独立勢力を築く有力な豪族たちを懐柔するために、太祖王権(왕권、在位918-943)は多くの婚姻関係を結び、官階を与えて高麗の臣下としていった。また、『政誠』(정계)と『戒百寮書』(계백료서)と呼ばれる官吏が政治を行う際の規範を作り、中央集権的な官僚国家を作り上げる基礎を整え、新たな身分制度を作り上げていった。

その後、各地の有力豪族達による社会不安が続き、反乱が相次いだ。第四代国王の光宗(광종、在位949-975)は弱い王権を憂い、強い王権の下、一つにまとまった国を作るべく、政治改革を断行した。956年、奴婢按檢法(노비안검법)によって豪族たちによって奴婢(奴隸)にされていた人々を良人(一般平民)に戻させるように命じ、豪族たちの勢力を削いだ。また、958年に科挙(과거、官僚登用試験)制度を導入し儒教による文班官僚を選抜する試験を行い、自ら皇帝を名乗り独自の年号を使用して王権強化に努め、官僚国家を完成させようとした。

後を継いだ景宗(경종、在位975-981)は光宗の政治改革を続け、976年に田柴科制度(전시과제도)と呼ばれる官僚に対する土地支給制度を整え、さらに成宗(성종、在位981-997)によって三省六部の官僚制度が完成された。ここに朝鮮王朝まで引き続く文武両班(문무양반)による官僚統治が始まることとなる。

2. 北進政策と仏教興隆

993年、契丹は80万の兵を率いて、高麗へ侵入してきた。しかし、高麗軍は契丹軍を清川江で食い止め、巧みな外交交渉によって契丹と和平を結び、鴨緑江以南の土地を支配するようになった。契丹軍が退却した後、高麗は江東六州(강동육주)と呼ばれる城を築いた。

その後1010年、契丹は第二次侵入を行ってきた。今度は契丹皇帝聖宗が40万の兵を率い、首都開京(개경、開城)を占領し高麗の文物や建築物を焼き払った。国王は羅州まで逃れ、契丹は高麗に対し江東六州の割譲を迫ったが、楊規(양규)率いる高麗軍の抵抗により、国王の入朝を条件に撤退した。しかし国王の契丹入朝は、高麗側の曖昧な態度によって実現しなかった。

これに対し契丹は、国王入朝と江東六州の割譲を求めて、1018年に第三次侵入を行い、10万の兵が国境を越えてきた。高麗は姜邯賛(강감찬)率いる20万の兵で迎え撃ち、龜州

の戦闘において大勝利をあげた。高麗はその後、北方の土地を守るため、1033年から十年を費やして、鴨緑江下流の義州（의주）から東海岸の定州（정주）まで千里の長城を築き、契丹と女真の圧力に対抗した。

一方、契丹との戦争の最中にも、高麗の文化は発展を続けた。契丹の侵略から国土を守るため始められた仏教經典を集大成する蔵版事業は、1011年から1087年までの歳月がかけられ、『高麗大蔵經』（고려대장경）として完成した。さらに1091年には王族出身の義天（의천、大覚国師）が教蔵都監（교장도감）という官庁を設置し、日本・宋・遼から25年かけて集めた仏書を編纂し、『新編諸宗教総録』（신편제종교장총록、『続蔵經』とも呼ばれる）を刊行した。

義天はまた、宋への留学を果たし高麗で天台宗（천대종）を創始し、当時の高麗仏教界を二分していた教宗（교종）と禪宗（선종）の対立を克服すべく努力した。後に禪宗は知訥（지눌、普照国師）が曹溪宗（조계종）を開き、華嚴宗・法相宗とともに、高麗時代の四大宗派として栄えた。

王室の仏教に対する尊崇も厚く、多くの寺院が各地に建てられ、国王自らがしばしば参詣を行った。また正月15日に開かれる燃燈会（연등회）と11月15日に開かれる八関会（팔관회）は国家的行事として盛大に行われ、二大国儀と称した。燃燈会では全国の寺院で燈火が掲げられ国家太平を祈念し、八関会では国土の山川に対する祭祀を行い女真や各国使節を参列させた。

高麗は、科挙においても僧科と呼ばれる僧侶になるための試験を施行し、儒教を「治国之教」、仏教を「修身之教」と位置付け、国を動かす理念として共に積極的に支援していた。強い国力と高い文化を保ち、『三国史記』（삼국사기）などの歴史書編纂事業や、金属活字による書籍印刷が行われ、また、高麗青磁をはじめとする多彩で優雅な各種工芸品が作られた。宋から使節としてやってきた徐兢は『高麗図経』（고려도경）に当時の繁栄した首都開京の姿を詳しく書き記している。

3. 武臣政権の成立

12世紀に入り、高麗が金¹の圧力を受けるようになると王権は再び不安定になり、門閥貴族が台頭してきた。1126年、漢江一帯の政治勢力を背景に仁州李氏である李資謙（이시겸）が反乱を起こすと、1135年には西京（平壤）への遷都を訴えていた西京出身の政治勢力が僧侶妙清（묘청）を中心に結託し反乱を起こした。

二つの内乱は国内を大いに動揺させ、身分秩序を揺るがせるきっかけとなった。1170年、かねてより文班官僚から蔑視を受けていた武班官僚がクーデターを起こし、多くの文臣を殺害し、鄭仲夫（정중부）を中心とする武臣が政権を掌握した。高麗は儒教の文治主義によって常に武臣は文臣の下位に置かれてきたが、国際関係が安定した時代に入ると武臣に対する差別は深刻なものになっていた。ここに武臣たちの不満が爆発し、奇しくも日本の鎌倉幕府成立とほぼ同時期に武臣による政権が作り上げられることとなった。

しかし、武臣たちによる政治運営は、文臣官僚と違い儒教に成り代わる政治倫理を持たず、暗殺やクーデターによる権力争奪を繰り返し、民衆に対する収奪もさらに強化された。有力な武臣たちは私兵集団を各々集め、自己の保身を図り、また政敵と抗争した。

¹ 中国東北地方に住むツングース族の一派である女真族が建てた王朝。宋を攻撃して黄河流域を領土としたが、後にモンゴルによって滅ぼされた。1115 - 1234年。

1196年に崔忠献(최충헌)が権力を握ると、やや政権は安定するようになった。乱れた政治倫理を正し、また文臣たちを登用し政治運営を確実なものとした。さらに、自らの私兵集団を「都房」(도방)と呼ばれる組織に整備し、教定都監(교정도감)と呼ばれる官庁を設置し、そこの長官である教定別監(교정별감)として人事や政治を掌握するようになった。その後、教定別監の地位は崔忠献の一族に受け継がれ、崔氏政権が四代にわたって続くこととなる。

こうして武臣政権は安定期に入ったが、一旦秩序が乱れたことによって、世の中には下克上の風潮が蔓延した。収奪が厳しくなった農村は流亡によって荒れ果て、農民は盗賊となり、またしばしば反乱を起こした。

平安道では1174年に趙位寵(조위충)が西京で反乱を起こすなど、西賊と呼ばれる農民たちによる反乱が頻発した。また、慶尚道においても反乱が頻発し、南賊と呼ばれ開京の貴族達を恐れさせた。

また奴婢や下層民衆による反乱も起こった。1176年には、公州(공주)の鳴鶴所(명학소、忠清南道)で亡伊(망이)・亡所伊(망소이)が蜂起し、一時は公州を占領するほどの勢力となった。また1198年には開京で、万積(만적)を中心とした奴婢によって蜂起が計画された。この計画は事前に発覚し鎮圧されたが、その後も反乱が次々と起こった。これらの頻発する反乱に対し、崔氏政権は収奪を緩和し民の不満を和らげる政策を取らざるを得なかった。

4. モンゴルの侵入

高麗の武臣政権が安定期に入った頃、大陸の中央部ではモンゴル族が一つにまとまり、金に対する攻撃を始めた。優れた騎馬兵によってモンゴルの勢力は急速に広がり、金を滅ぼし、西は遠く中央アジアを越える遠征を果たした。

高麗には1231年、第一次侵入が行われた。撒礼塔(살례탑、サルタイ)によって率いられたモンゴル軍は開京を囲み、忠州まで攻め入った。最終的に高麗側からの和議をモンゴル軍が受け入れ撤退したが、この時に1087年に彫造された『高麗大蔵経』は焼き払われた。これ以降、高麗は約30年六次にわたるモンゴルの侵入を受けることになる。

翌年、時の権臣崔怡(최이)はモンゴルとの長期抗戦に備え、高麗は江都(강도、京畿道江華島)へ遷都し、島内に大規模な宮城を築いた。これは海戦が不得意なモンゴル軍を想定しての措置であった。海路を通じて各地からの租税を集め、海上首都として機能した江都は、以前と変わらず国家行事を盛大に催した。また、モンゴルの侵入の際には、江華島に籠もって抗戦を行い、内地住民にも山城や海島に籠もって戦うように指示した。1236年からは、モンゴル軍の退散を祈念して再び『高麗大蔵経』の蔵版事業が行われた。現在に伝わる『高麗大蔵経』はこの時に作られたものである。

しかし、モンゴルとの抗戦が長期化するに従って、内地の人々の被害は目を覆わんばかりの惨状を呈した。侵入のたびに多くの人々が奴隷として連れ去られ、全土に人々の屍が転がりモンゴル軍が通った城や村落は焼き払われた。ついに国王を中心とした講和派がモンゴルとの親交を結び、強硬派の武臣勢力を追いつめるようになった。1158年に崔氏政権が倒され、1170年に残った武臣勢力を排除して開京へと首都を戻すことになった。

これに対し武臣勢力は、最後までモンゴルに屈服することを拒み、反乱を起こした。対モンゴル戦争で活躍した三別抄（삼별초）と呼ばれる軍隊が、將軍裴仲孫（배중손）の指揮によってもう一つの高麗政府を樹立し、王族の一人である承化侯温（승화후온）を国王に据え、国中に反モンゴル戦争を訴えて珍島（진도、全羅南道）に遷都した。しかし、翌年に珍島は陥落し、さらに拠点を濟州島（제주도）に移して抵抗を行ったが、1273年に鎮圧された。

この時代、モンゴルの侵略を受け、高麗では民族意識が高まった。この時期に一然（일연）が書いた歴史書『三国遺事』（삼국유사）には『三国史記』では書かれなかった民間の伝説や郷歌が記され、その冒頭には檀君神話が載せられている。結局、元²は長期抗戦を行う高麗を直屬領とすることを諦め、自らの駙馬国として高麗を遇した。高麗国王は元皇帝の娘を娶り、元の皇帝の駙馬（婿）として元に対する発言力を有するようになった。

5. 文化・技術の発展

元と講和を結んだ高麗は、元の日本侵略³のために軍船や兵士を提供させられ、国土は疲弊した。また、元は高麗国王を媒介として、高麗に対する干渉を行った。元皇室と高麗国王はその独特な関係によって結びつき、高麗は元からの強い干渉を受けながらも、互いに影響しあう関係となった。

14世紀に入り、忠宣王（충선왕、在位1308-1313）は王位を息子に譲り、元の首都北京に移り、万卷堂を建て、ここで元の高名な儒学者である趙孟頫（ちょうもうふ）や姚燧（ようすい）を招き、李齊賢（이제현）ら高麗の儒学者と討論を行わせた。当時、朱子学⁴が高麗でも広がりはじめ、忠宣王の学術振興は新しい儒学を成長させるきっかけとなった。

またこの時期は、科学技術が発達した時代でもあった。元から綿花の種が伝わり、高麗で綿花栽培が始まり、広く綿布が普及した。農業においても、施肥法の改良、牛による深耕法の普及によって農業生産力が大いに高まった。1350年以降、倭寇（왜구）の略奪が深刻化し、南海岸を中心に被害が広がったが、これに対抗すべく高麗では崔茂宣（최무선）が火砲と火薬を製造し、艦船に装備させて倭寇討伐を行い、大きな効果があった。

恭愍王（공민왕、1351-1374）の時代に入ると、東アジアの国際情勢が再び大きく変わり始めた。元の国力が衰え、元は新興の明⁵によって北方へ逐われる情勢となり、やがて明が中国を統一することとなった。

一方、高麗国内では王族や有力者が大きな土地を所有するようになり、親元派貴族は高麗の政治を大きく揺さぶる勢力となっていた。朱子学の影響を受けた新興士大夫（사대부）

² モンゴルの大ハーン世祖フビライは1271年に国号を「大元」と改めた。

³ 日本で言う元寇。文永・弘安の役とも言う。三別抄の乱が鎮圧した翌年である1274年と、南宋を滅ぼした翌々年の1281年に、二回にわたって日本に攻め入った。

⁴ 中国、南宋の朱熹が提唱した新儒教思想。「理」と「気」による世界把握を行い、宇宙の成り立ちから人間の心、倫理の有り様までを論理的に体系化した。性理学、程朱学とも呼ばれる。

⁵ 朱元璋が建てた漢民族による王朝。元を北方に追い払い、中国全土を統一した。1368 - 1644年。

⁶は、親元勢力と深く対立し、恭愍王は元との関係を断ち、政治改革を行おうと志した。

1356年、恭愍王は反元改革を始め、親元勢力を処刑した。また元の直属領となっていた双城総管府（쌍성총관부）を攻撃し、和州（화주、現在の咸鏡南道永興）地方を取り戻した。さらに権門勢族によって不法に奪われた土地の返還と奴婢の解放を進め、儒学教育の振興にも取り組んだ。しかし急激な改革に権門勢族の反発は強く、やがて改革は失敗し、恭愍王もまた暗殺されることとなった。

⁶ 新興士大夫の多くは地方の中小地主や下級役員出身で、生産力の向上とともに経済的基盤を築き、新しい儒学である朱子学を学び、科挙を通じて中央政界に進出していった。